

編纂所だより

大阪市史編纂所（発行）

〒550-0014 大阪市西区北堀江 4-3-2

第50号

大阪市史料調査会（編集）

大阪市立中央図書館内 TEL06-6539-3333

●『新修大阪市史 史料編』第11巻「近世VI村落1」

このたび大阪市史編纂所は、摂津国西成郡（現大阪市北部・中央西部）の村々をとりあげた『新修大阪市史 史料編』第11巻「近世VI村落1」を刊行しました。本書は、領主支配、村の様相、村政と民衆運動、治水・水利、新田、農産業、村の生活文化等の視点から、近世における西成郡の村落史料を紹介しています。次に述べるように、西成郡には近世畿内の特徴を浮き彫りにできる史料が豊富に残されているので、その史料を収載した本書の刊行は、近世畿内村落史研究を進展させる一助になると思われます。購入をご希望の方は、発売元である大阪市史料調査会（電話06-6539-3333）までお問い合わせください。（本体価格 5,500円）

●西成郡からみる近世畿内の特徴

近世畿内は経済的先進地といわれています。近世の西成郡についても、その傾向がうかがえます。たとえば、土地生産性（1反あたり石、反収）の高さがあげられます。西成郡江口村（現東淀川区）の農業経営史料をみると、18世紀末から19世紀半ばにかけて、米の反収は約2石～3石を計上していました（末中哲夫「摂津国西成郡江口村中野家文書『永代記録日記』」『近世史研究』第2巻第11号、1956年）。これは全国的にみても、高い水準に位置します。

このような高い土地生産性を実現した要因は、早くから技術進歩がみられたことにあります。たとえば畿内農村においては、すでに17世紀末から18世紀初頭の元禄期頃には肥効の高い購入肥料が普及していました。西成郡の場合、村勢を示す村明細帳の記載から、元禄5年（1693）の十八条村（現淀川区）で購入肥料の干鰯が用いられていたことがわかります。

土地生産性にかかわる治水・水利についても、たとえば、灌漑後の排水、または滞留水の排除のための努力がなされました。西成郡では、延宝6年（1678）に開削された中島大水道が著名です。北中島地域



「海表新田并北中嶋絵図（一部）」（大阪市史編纂所蔵）より。
『新修大阪市史 史料編』第11巻「近世VI村落1」に掲載。

(図)は、低湿地で排水性が悪い地域でした。さらに上流から運ばれてくる土砂が川床を高めたので、北中島地域においては排水・滞留水の排除が難しくなっていました。そこで北中島の22か村の農民たちは、排水・滞留水を海へ排出するために、全長約9.5キロに及ぶ人工排水路を幕府の資金援助なしに開削しました。この排水路こそが中島大水道です。享保13年(1728)の史料によると、幕府領の場合、この大工事によって、開削後10年間で年貢収納高が合計およそ8,639石増えたといえます。このような大工事も、土地生産性を高める要因となったのでしょう。

一方、近世畿内においては綿作や菜種作も盛んでした。作付状況を示す史料によると、西成郡においても綿作と菜種作が広く行われていました。こうした綿作や菜種作の展開は、非農業部門の成長も促しました。たとえば綿については、安政4年(1857)、稗島村(現西淀川区)の村役人が白木綿を村の産物として報告したように、西成郡では綿加工業も展開していました。ちなみに、この稗島村を例にとると、安政5年(1858)には、村内3,548人のうち745人が商人であったといえます。彼ら商人は、米・麦・木綿・実綿・干物等を大阪へ売りに出ていました。このように稗島村には商人が多く居住していたことがわかります。

しかし、非農業部門の成長は、新たな問題を生み出しました。たとえば、天保12年(1841)において北中島の村々が結んだ地域協定によると、年貢納付義務の伴う所有地を持たない無高が農業よりも諸商売に携わり、「小商人」化していたことが問題となっていました。非農業労働の需要増加は、非農業部門の賃金を高め、農業から非農業への労働移動を促すようになります。結果として、希少な資源となった労働力の奪い合いが生じ、農業労働の賃金、あるいは賃金に影響される小作人の取り分〔収穫分－(年貢諸役＋地主取り分)〕も上昇します。こうして彼らと雇用契約、あるいは小作契約を結んで所有地の耕作をさせる地主らは、何らかの対策(選択)を迫られることになりました。このような状況が生まれたのも、畿内の特徴のひとつでした。

これまで紹介してきた西成郡の様相は、『新修大阪市史 史料編』第11巻「近世VI村落1」から読み解くことができます。本書は、以上のような特徴を有する近世畿内を浮き彫りにすることができる点で、好適な史料集です。(萬代 悠)

●「笑都大阪」ショートストーリー 消えた“ゆるキャラ”の元祖 チョロケン

今年度秋～春のNHK朝の連続テレビ小説は「わろてんか」です。笑うことが大好きな主人公「藤岡てん」は主人の藤吉(郎)と共に寄席を経営し、「笑い」を通じて成功を遂げるサクセスストーリーです。「藤岡てん」のモデルとなったと思われるのが、稀代の女傑「吉本せい」。大阪、否日本を代表するエンターテインメント企業である吉本興業の創業者です。明治45年(1912)、大阪天満宮の裏にあった寄席小屋を買い取り、オープンしました。吉本興業の発祥です。大正7年(1918)、法善寺裏にあった金沢亭を買収。ここに吉本興業がミナミへ進出するきっかけとなります。巨額2万円(およそ現在の2億円程度)を投じた買収劇に一か八かの社運を託し「花と咲くか月と欠けるか」から小屋の名前を「花月」としました。爾来幾星霜、大阪の文化を語る上で、笑いのエンターテインメントは欠かすことのできないツールとなっています。

さて皆さんはドラマ「わろてんか」の冒頭に登場した着ぐるみ『上方』第25号より。



るみのような大道芸に気づかれたでしょうか。大きな胴体に描かれた顔はベロッと舌を出し、黒いシャッポをかぶった姿は、キモカワなゆるキャラといった感じです。横で頭巾を着けさらをもった音頭取りが拍子をとっています。彼の名は「チョロケン」。江戸時代から明治にかけて大阪を中心に京阪地域で盛んであった正月の門付けの大道芸でした。チョロケンの語源は「長老君」で、七福神の福祿寿などに扮装し、鐘で囃し立て「チョロが参じました、チョロチョロ」などと言いながら各家々をまわりました。因みにそのおどけた姿から大阪弁の「ちょける」の語源になったともいわれています。その後、写真のような姿となり、市中に盛んに出没し人々に親しまれました。しかし時代と共に廃れ、昭和の初めには既に消滅していました。郷土史家 南木芳太郎主宰の「上方郷土研究会」でも消えた大道芸として盛んに取り上げられ、昭和8年(1933)、大阪商工会議所主催「大阪商工祭」の同団体が時代考証で協力した「上方町人扮装行列」にも登場しています。

時代は下り平成26年(2014)、大阪城天守閣では芸能集団 東西屋(主宰:林幸次郎)と共にチョロケンを復活。今年(平成30年)正月2日・3日の両日には「ちょろけんと迎えるお正月～幕末・明治のにぎわい風景～」が催されました。また大阪土産としてチョロケンをテーマにしたお菓子も販売されるなど、消えたキャラクターが今、再び大阪の街に復活の兆しあり。(古川武志)

◆ 新刊のご案内

『大阪の歴史』第86号

- 橋寺 知子「建物にみる御堂筋の80年」
 山口 哲史「四天王寺別当の成立と十禅師」
【主な内容】 片山 早紀「伊能忠敬の神崎川通測量
 一大坂・淀川から神崎川へ」
 武部 好伸「日本に初めて映画を持ち込んだ男
 一大阪の実業家、荒木和一」
 關 一【史料紹介】遺稿「志乃婦草」

本体価格700円 送料実費



刊行物のお求め方法

大阪市史編纂所の刊行物は大阪市史料調査会で窓口・通信販売を行っています。また、下記の書店でお求めいただけます。詳しくは大阪市史料調査会(市立中央図書館3階市史編纂所内・電話06-6539-3333)までお問い合わせください。

取り扱い書店：ジュンク堂書店(大阪本店・難波店)、旭屋書店(天王寺M I O店)、
 紀伊國屋書店(梅田本店) ※『大阪の歴史』最新刊のみ取扱い

★大阪市史編纂所では、ホームページを開設し市域の歴史に関する情報を発信しています。

http://www.oml.city.osaka.lg.jp/?page_id=871 または「大阪市史」で検索してください。

今日、大阪でどんな出来事があったかを知る「今日は何の日」、催し物や刊行物を紹介する「おしらせ」、
 「みんなの質問」では、全国の図書館に寄せられた「おおさか」に関する質問と回答を掲載しています。
 また、この「編纂所だより」のカラー版の閲覧とダウンロードも、上記ホームページより可能です。

絵はがきでみる昔の大阪 (28)

新京阪ビルディング (1926年竣工)

このビルは天神橋筋六丁目にあった建物です。絵はがきでは「新京阪ビルディング」という名称ですが、のちに新京阪が京阪に合併されたので「京阪ビルディング」と改称されました。このビルは、7階建てで2階部分にプラットホームがあり、千里山行きと京都行きの電車が発着していました。



新京阪ビル (新京阪電車の広告)

大阪電気鉄道といいますが、昭和3年に新京阪鉄道となり、昭和5年に京阪鉄道と合併し京阪鉄道となりました。ところが戦時中の昭和18年(1943)に阪神急行電鉄(現阪急電鉄)と統合され京阪神急行電鉄となりました。戦後、昭和24年(1949)にはこの統合が廃止され、京阪神急行電鉄(現阪急電鉄路線)と、



京阪ビル (京阪電車の広告)

京阪電気鉄道(現京阪電鉄路線)に分かれました。すなわちもとの京阪電鉄路線の一部が新しい京阪神急行電鉄になったのです。京阪神急行電鉄は昭和48年(1973)にそれまでの愛称である阪急電鉄を正式な社名としました。さて、このビルは昭和45年(1970)の万国博覧会に備えて、会場に人々を運ぶため、新設の地下鉄堺筋線と阪急が相互乗り入れすることになり、新しく地下駅がつけられました。昭和44年(1969)12月に相互乗り入れが開始されています。なお、地下鉄谷町線に天神橋筋六丁目駅ができるのは昭和49年(1974)のことです。

(堀田暁生)

「編纂所だより」は3月と9月の年2回発行し、大阪市立各図書館のほか、各区役所、各区民センター、市役所市民情報プラザ、総合生涯学習センター及び各市民学習センター、大阪歴史博物館、大阪城天守閣、住まいのミュージアムなどに置いています(数に限りがあります)。大阪市立中央図書館(3階大阪コーナー)及び各区の図書館では最新号を常備していますので、カウンターでおたずねください。